様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ１６８３２

研究課題名（和文）近代日本の傷痍軍人の実態に関する歴史学的基礎研究

研究課題名（英文）Historical research on Japanese disable veterans

研究代表者
植野　真澄（UENO, Masumi）

東洋大学・文学部・助教

研究者番号：５０４４６２７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では主に,既に解散した傷痍軍人団体の旧蔵資料の整理とその資料目録の作成を行った。また、これらの資料に含まれていた傷痍軍人の調査記録をデータベース化し、その調査概要を学会発表を通じて紹介し、調査個票の調査方法を記した史料の一部翻刻を行った。
そして、本研究で用いた資料を広く研究者に今後公開し活用できる環境を作るため、本研究で行った資料整理が終了したものについては公的機関に資料提供を行った。

研究成果の概要（英文）：The object of this study was to analyze of the experiences of Japanese disabled veterans.This main results of this study are summarized as follows (1)This study put the historical materials of disable veterans group in order and made a list and its database.(2)donated the historical materials to archive and library.

研究分野：日本史

キーワード：近現代史　戦後史

１．研究開始当初の背景

（１）歴史研究における戦争の問題

近代日本における戦争については、歴史学、社会学、文学、政治学、国際関係学、法学、経済学など様々な分野においてこれまで研究が進められており、現在も進められている。

中でも、戦争の人的被害に関する研究については、戦死者を中心に、主に歴史学や社会学、民俗学、宗教学、文学、等の分野において進められてきた。

とりわけ日本の場合は、靖国神社の戦没者合祀問題が政治・外交上の課題としても常に議論の対象となっているため、国家の戦没者慰霊・追悼のあり方の問題は、研究者の間だけではなく広く国民的な議論のトピックとして注目されるところであった。その後、歴史学や社会学の分野において、戦没者遺族や旧軍人の戦後史を実証的に解明しようとする歴史研究が進められ、1990 年代以降は海外における「国民国家」論や戦争の「記憶」論の紹介とともに、戦没者の慰霊・追悼の行為について政治史、文化史、社会史的な視点から、日本の各地に設置された戦没者の慰霊碑や忠魂碑や、陸海軍墓地や忠霊塔といったモニュメントをめぐる研究がなされてきた。民俗学の分野においても、各地に存在した戦没者慰霊の行事の意味を読み解こうとする研究が生まれている。靖国神社の合祀をめぐる実証研究についても、新たに公開された地方自治体が有していた行政文書などを用いた実証研究が進められている。近年では、戦没者の遺骨収集について、沖縄や海外における遺骨収集の歴史に関する実証研究も積み重ねられているところである。

（２）戦争研究の中の傷痍軍人問題

しかしながら、これらの諸研究は、戦没者をめぐる国家・社会に関する研究であり、戦死者の戦死の実相の解明、という点においては、西南戦争や日清・日露戦争といった他の近代日本における主要な戦争に比べて、とりわけ第二次大戦時の戦死者については、史料上の制約からも十分に進められてきたとは言い難いのが現状である。

そのため、申請者は傷痍軍人に着目し、関連団体の所蔵資料調査や聴き取り調査を行ってきた。その成果の一部は、これまでに論文として発表してきたが、このような傷痍軍人団体の資料を主に用いた歴史研究は申請者の研究が先行研究として存在する。主に以下の通りである。

・植野真澄「白衣募金者一掃運動に見る傷痍軍人の戦後」『日本学報』22、大阪大学大学院文学研究科日本学研究室、95～116 頁、2003 年 3 月

・植野真澄「占領下日本の再軍備反対論と傷痍軍人問題～左派政党機関紙に見る白衣の傷痍軍人～」『大原社会問題研究所雑誌』550・551、大原社会問題研究所、1～16 頁、2004 年 9･10 月

・植野真澄「＜白衣募金者＞とは誰か～厚生省全国実態調査に見る傷痍軍人の戦後～」『待兼山論叢』（日本学篇）39、大阪大学文学会、31～60 頁、2005 年 12 月

・植野真澄「傷痍軍人・戦争未亡人・戦災孤児」『日常の中の総力戦』(『岩波講座アジア・太平洋戦争』第 6 巻)、181～208 頁、岩波書店、2006 年 4 月

しかしこれらは主に傷痍軍人団体が刊行した定期刊行物を分析に用いたものであったため、旧軍人団体の一つとしての傷痍軍人団体の運動史的な分析の側面が強く、その成員である個々の傷痍軍人の戦後の実態は明らかにされていなかった。それはひとえにそうした実態分析を可能とする史料の多くが散逸し、あるいは資料保存専門機関に収蔵されても個人情報を主な理由として一般に公開される史料はほぼ皆無であることに由来する。

そのため、本研究では既に解散した傷痍軍人団体の協力を得て、同団体の旧蔵資料を用いて、その資料整理とともに第二次世界大戦による傷痍軍人の実態について、同会会員の戦傷病について記録した個票のデータを解析しようと考えた。

２．研究の目的

本研究では、主に第二次世界大戦により傷病をおった日本の傷痍軍人について、傷痍軍人団体の旧蔵資料の全容解明とともに、その資料整理を通じて傷痍軍人の実態を把握することを目的とする。

また、前述の「１、研究開始当初の背景」でも指摘したように、この分野の歴史研究が進展しない大きな原因の一つは史料上の制約によるものであるため、本研究で扱う資料については今後広く研究者の利用に供することが可能になるよう、その方法を模索することも本研究の重要な課題の一つであるため、公開手段の検討も目指すものである。

具体的には以下の通りである。

（１）傷痍軍人団体旧蔵資料の整理と目録化

解散したある傷痍軍人団体から提供を受けた資料の全容を把握することを目的とする。内容に応じた目録の作成はその前提として必要な作業である。

（２）傷痍軍人データベースの作成

上記（１）の作業をふまえて、どのような史料をデータベース化すればよいかを検討の上、傷痍軍人の戦後の実態解明に必要なデータベースの構築をはかる。

（３）史料の一般公開に向けた予備作業

本研究の分析対象とする同会資料については戦傷病の実態を伝える歴史的価値の高い一次史料群であり、かつての戦争を伝える

一つの公共財産としての性格を有することから、本研究終了後は個人情報に十分配慮した上で、今後は広く研究者の利用の便が可能になるよう、旧蔵者とも話し合いながら資料の性格に応じた公開手段を検討する。

３．研究の方法

本研究では、主に申請者が調査研究のために提供を受けた傷痍軍人団体が作成した同会会員の調査個票を用い、一地域の傷痍軍人の戦傷病の実態と、彼らの戦後の生活状況を実証的に明らかにすることを目的とし、その調査個票のデータベース化ならびにそのデータベースを用いた実証研究を行うことを目指した。そのために主に以下のような方法で本研究を行った。

（１）資料整理と資料目録の作成

各々の資料の作成時期と作成目的に応じた分類と整理を行い、資料の簿冊目録の作成を行った。戦傷病者の実態に関わる重要な情報については詳細目録をあわせて作成し、資料のナンバリングとともにデータ化を進めることとした。

但し、いずれも作成後数十年を経過した資料群であったため、資料の保存状態を確認しながら適宜ファイリングやデータ化などの措置を施しながら資料整理を進めることとした。

（２）個別資料のデータベース化

傷痍軍人の個々の戦傷病の実態を伝える実態調査資料を抽出の上、その調査項目に即したデータベースを構築するものとした。

複数の調査記録があると予測されたため、比較検討の上、各々の調査方法や調査対象について調査しながら、データベース化の対象資料を選定することとした。

（３）関係者への聞き取り調査

傷痍軍人団体の関係者に聞き取り調査を行い、本研究が扱う資料に関する情報収集につとめた。

（４）既存の研究成果の調査並びにその公開方法の調査

本研究が対象とする傷痍軍人団体資料に関連する資料のうち、各地の地方自治体の公文書館や文書館、資料保存専門機関における旧軍人団体資料の所蔵状況及びその公開方法の調査を行うものとした。

４．研究成果

本研究を通じて得られた研究成果は主に以下の通りである。

（１）資料整理と資料目録の作成

本研究が対象とした傷痍軍人団体資料の資料整理をその目録作成とともに行った。

資料の大半が資料作成時期から数十年以上を経たものであったため、目録作成に際してはまずは資料の状態を確認しながら資料の養生ならびに現状保護を目的とした簡易的な保護処置を行った。

また、未整理資料については現状保存を第一義としてファイリング並びにナンバリングを行い、資料群の全容解明に努めた。

中でも劣化が激しい資料については一部スキャニングや翻刻作業を行い、現状の記録を取ることに努めた。

（２）個票のデータベース化

当初データベース化を予定していた傷痍軍人の調査票よりも多くの種類の資料が存在することが今回の資料整理を通じて判明したため、研究方法の再検討を行った。

まずはそれぞれの調査票がいつ、どのような目的で、どの範囲で、どのような形で作成されたのかを把握することに努め、その作業を通じてデータベース化を行う調査票の優先順位を付けることとしたが、そうした調査方法に関わる記録資料の残存状況は思わしくなかったため、調査データそのものの分析に寄らざるを得ない点については、周辺資料の再調査とともにデータ化の方法と範囲について再度見直すこととした。周辺資料の再調査の一つとして、同団体の定期刊行物のデジタルデータ化を行い、関連情報の抽出を行うことで補うこととした。

また、データベース化の作業にあたっては、本研究で用いる資料が調査全体の資料の中でどの程度の残存資料なのかを把握する必要があったため、最初に調査個票の仮目録を作成することとした。

その目録の作成にあたっては、調査方法を記した資料を特定し、それぞれの調査票との照合をはかることとしたが、資料によっては欠落の多い調査個票群があることも判明したため、データベース化の目的を再度検討し直し、部分的な調査であっても仮目録は作成の上で今後の分析データの参考にすることとした。

但し、以上の作業を通じて問題になったのは、調査個票に出てくる対象者の改姓や記録された氏名の誤記等のために、異なる時期に作成された調査個票をそれぞれ関連づけ、データの紐づけに必要な個人名の特定が、容易ではないことが判明し、調査記録内容がデータ化されてもそのままの状態では分析に用いることは非常に困難であることが明らかになった。そのため、データ整序のために必要な調査個票の突き合わせ作業を行うことで、データベース化の準備を行った。

その作業についてはテレビでも取りあげられ、本研究の意義を紹介したところである。

（３）学会発表等での研究成果発表

詳細は後述の「５」に記した通りであるが、データベース化の作業は途上であったため、部分的にその調査概要を学会発表を通じて

紹介し、論文（2）においては調査個票の調査方法を記した史料の一部翻刻を行う等して成果を公表した。

（４）公的機関への資料提供
　本研究で用いた資料を広く研究者に今後公開し活用できる環境を作るため、本研究で行った資料整理が終了したものについては公的機関に資料提供を行った。主に地方自治体の公文書館の他、図書館、博物館に提供を行ったところである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　2　件）
(1) 植野真澄「「戦後 70 年」から見た日本の援護行政と戦争被害者問題の戦後史」『社会事業史研究』51、61～68 頁、社会事業史学会、2017 年 3 月、査読有
(2)植野真澄「戦後日本の傷痍軍人～1960 年代の白衣募金者対策～」『白山史学』52、39～59 頁、白山史学会、2016 年 6 月、査読無

〔学会発表〕（計　3　件）
(1)植野真澄「実態調査にみる傷痍軍人の戦後史～大阪府傷痍軍人会旧蔵資料が伝えるもの～」社会事業史学会、2017 年 5 月 13 日
(2)植野真澄「白衣募金者の実態調査に見る傷痍軍人の戦後」社会事業史学会、2016 年 5 月 14 日
(3)植野真澄「戦後日本の傷痍軍人～大阪府傷痍軍人会旧蔵資料が伝える傷痍軍人の戦中・戦後～」白山史学会、2015 年 11 月 28 日

〔図書〕（計　4　件）
（資料解題）
(1)植野真澄「解説：敗戦直後の傷痍者援護・保護対策」寺脇隆夫編『資料集戦後日本の社会福祉制度 第Ⅶ期「傷痍者・障害者福祉基本資料」』第 1 巻、柏書房、2015 年 12 月、385 頁（5～15 頁）
(2)植野真澄「解説：戦後処理問題としての旧軍事援護団体の戦後」寺脇隆夫編『資料集戦後日本の社会福祉制度 第Ⅵ期「戦後処理・遺家族援護・婦人保護基本資料」』第 1 巻、柏書房、2015 年 7 月、377 頁(1～10 頁)
(3)植野真澄「解説：戦傷病者戦没者遺族等援護法の制定過程について」寺脇隆夫編『資料集戦後日本の社会福祉制度 第Ⅵ期「戦後処理・遺家族援護・婦人保護基本資料」』第 3 巻、柏書房、2015 年 7 月、579 頁（1～11 頁）
(4)植野真澄「解説：戦傷病者戦没者遺族等援護法の制定と軍人恩給の復活」『資料集戦後日本の社会福祉制度 第Ⅵ期「戦後処理・遺家族援護・婦人保護基本資料」』第 6 巻、柏書房、2015 年 7 月、525 頁（1～5 頁）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
（報道）
（1）NHK 大阪総合「かんさい熱視線　シリーズ戦後 70 年：戦争の傷を”伝える”～戦後 70 年 継承の模索～」2015 年 11 月 13 日(金)放送

６．研究組織
(1)研究代表者
　植野　真澄（Ueno Masumi）
　東洋大学・文学部・助教
　研究者番号：50446275

(2)研究分担者
　なし

(3)連携研究者
　なし

(4)研究協力者
　なし